



16/05/07
第8回応用哲学会年次研究大会
ワークショップ

高谷遼平
横路佳幸

カプランの意味論の概説

モンスターを中心に

+ 目次

1. カプラン的意味論1：文脈と状況の区別
2. カプラン的意味論2：内包オペレーターとモンスターの区別
3. カプラン的意味論3：モンスターの禁止
4. モンスターは実在する？
5. 個人発表のテーマと本WSの流れ
6. 参考文献

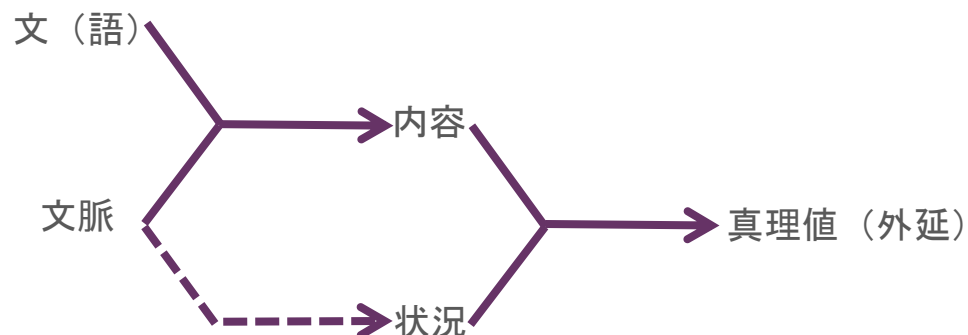
+ カプラン的意味論1：文脈と状況の区別

- 次のケースを考えよう（cf. Stalnaker 1970）。
 - (1) 「彼は馬鹿である」（発話者が太郎と次郎のいずれを見ているのかわからないが、聞き手はそれぞれが馬鹿かどうかを知っている）
 - (2) 「彼は馬鹿である」（発話者は太郎を見ているが、聞き手は太郎のことを何も知らない）
- (1)と(2)の真理値はともに不明である。
 - しかし(1)は「「彼」で誰が指されているのかわからない」という意味で不明であるが、(2)は「太郎が馬鹿なのかどうかかわからない」という意味で不明である。
 - この違いは、Q1「内容はどのようにして決定されるのか」という問題とQ2「内容の真理値はどのようにして決定されるのか」という問題の違いに対応する。

+ カプラン的意味論1：文脈と状況の区別

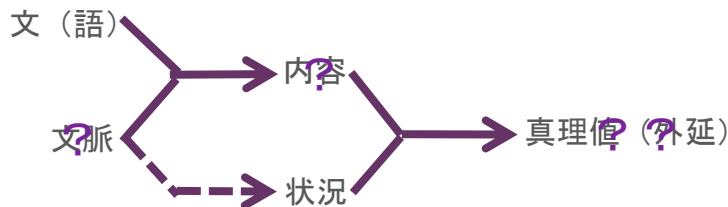
- Q1 「内容はどのようにして決定されるのか」
 - A1: 発話文脈によって決定される。
 - 文脈とは、行為者、時点、場所、世界という4つのパラメーターから成る。
- Q2 「内容の真理値はどのようにして決定されるのか」
 - A2: 値踏みの状況によって決定される。
 - 値踏みの状況とは、時点と世界という2つのパラメーターから成る。

カプラン的意味論の図式

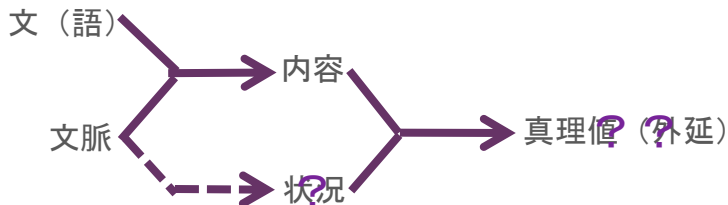


+ カプラン的意味論1：文脈と状況の区別

- 「彼は馬鹿である」の真理値は、文脈と状況という二つの指標に依存する
 - (1)発話者が太郎と次郎のいずれを見ているのかわからないが、聞き手はそれぞれが馬鹿かどうかを知っている場合



- (2)発話者は太郎を見ているが、聞き手は太郎のことを何も知らない場合



+ カプラン的意味論2：内包オペレーターとモンスターの区別

- 内包オペレーターとは何か？
 - 内包オペレーターは、状況のパラメーターを変動させるもの。
 - Ex. 文「花子は哲学者である」に必然性オペレーター「□」が付与された文のとき、その真理値は、「花子は哲学者である」の真理値をあらゆる世界で値踏みする場合かつその場合に限り得られる。
 - 文「□Φ」が文脈 c と状況 (w, t) において真である iff すべての世界 w' について、「Φ」が文脈 c とあらゆる世界 (w', t) で真である
- Ex. 文「花子は哲学者である」に現在性オペレーター「NOW」が付与された文のとき、その真理値は、「花子は哲学者である」の真理値をそれが発話された時点で値踏みする場合かつその場合に限り得られる。
 - 文「NOWΦ」が文脈 c と状況 (w, t) において真である iff 「Φ」が文脈 c と状況 (t_c, w) で真である (t_c は c の時点を指す)

+ カプラン的意味論2：内包オペレーターとモンスターの区別

- モンスター（monster）とは何か？
 - モンスターは内包オペレーター以外のすべてのオペレーターを指す。
 - Ex. 話し手と聞き手の文脈的解釈をひっくり返すような語「SWAP」を考えよう（cf. Rabern 2012）。
 - 「SWAPオペレーター」が文「私は君を愛している」に付与されたとき、その内容は、文「私は君を愛している」における話し手と聞き手の内容がひっくり返される仕方で決定される場合かつその場合に限り得られる。
 - 「SWAP! 私は君を愛している」と太郎が花子に対して発話した場合、その内容は「花子は太郎を愛している」になる。
 - 語「私」の文脈 c における内容= c の話し手
 - 語「SWAP（私）」の文脈 c における内容= c の聞き手
 - 語「SWAP（君）」の文脈 c における内容= c の話し手

+ カプラン的意味論3：モンスターの禁止

- そもそもモンスターは実在するのか？
 - カプランによれば、モンスターは（自然言語には）存在しない。
 - なぜなら、モンスターは**指標詞の一定性**に反するから。
 - Ex. 「SWAP! 私はあなたを愛している」と太郎が花子に対して発話した場合、「私」の指示対象は太郎ではなく花子になってしまう。すると、指標詞「私」の一定性、すなわち**文脈がいったん固定**されると、「私」の指示対象は一定であるという考えが失われる。
- それゆえ、カプラン的意味論においては、**指標詞の一定性を維持**するためには、**モンスターの禁止**が不可欠。

+ カプラン的意味論3：モンスターの禁止

指標詞は常に第一の作用域をとると述べることによって、原理2 [訳注：指標詞は直接指示的であるという原理] をより理論負荷的な仕方
方で表現することもできる。もしこのことが真であるならば——そ
して実際に真なのだが——そうした第一の作用域内で指標詞の意味
特性を操作できるオペレータなどありえない。なぜならば、そのと
き指標詞は、そうした作用域からオペレータの前方にまでたやすく
跳びだしてしまふからである。私は、そうしたオペレータをもった
言語を構築することができないと述べているのではない。単に英語
がそうした言語ではないと述べているにすぎない。

(Kaplan 1989, p. 510)

+ カプラン的意味論3：モンスターの禁止

- 本WSでは、一定性 (**constancy**) と、直接指示性 (**direct reference**) あるいは固定性 (**rigidity**) を次のような区別によって定義する。
 - ある語 α が直接指示的あるいは固定的である $=_{df.}$ α の指示対象はあらゆる値踏みの状況で固定されている（値踏みの状況を介さずに α の指示対象が決定される）。（cf. Kaplan 1989, p. 493）
 - ある語 α が一定的である $=_{df.}$ α の使用される文脈がいったん決定されれば、 α の指示対象は固定される。
- 一定性は直接指示性を含意するが、逆はその限りではないことに注意。

+ モンスターは実在する？

- しかし近年、モンスターは実在するという議論が盛んになりつつある（cf. Rabern 2012; Santorio 2012; Predelli 2008）。
- (1) 君の服が燃えていると私は信じる。
- (2) 私の服は燃えていないと私は信じる。
- (1)と(2)は、明らかに両立する信念を表す。しかし、いま仮に太郎が鏡を見ており、燃えているのが太郎の服である場合、指標詞の一定性によれば(1)と(2)の「私」と「君」は同じ指示対象を持つ。すると、それぞれの信念は矛盾してしまう。
- 「信じる (believe)」がモンスターならば、(1)の「君」は太郎以外の誰かを指し、(2)の「私」も太郎以外の誰かを指すとみなすことができる。
- これにより、(1)と(2)の矛盾は避けられる（...が、指標詞の一定性には反する）。
- 他にも、認識様相文や直説法的な条件文、虚構文でも同様の問題と解決が論じられる。

+ モンスターは実在する？

■ モンスター実在論者の論証

前提1：指標詞の指示対象は文脈によって決定される。

(指標詞の文脈依存性)

前提2：いったん文脈が固定されると、指標詞の指示対象は変動しない。

(指標詞の一定性)

結論：モンスターは存在しない。(モンスターの禁止)

反例：いったん文脈が固定されても、態度帰属文などではその指示対象は変動しうる。(モンスターの実在) それゆえ、少なくとも前提2と結論を拒否せねばならない。

■ モンスターおよびその周辺概念をめぐる議論は、カプラン的意味論への再考を迫っている！

+ 個人発表のテーマと本WSの流れ

- このあと、各人はおおまかに次のことについて論じる予定。

仲宗根 : 直接指示性・一定性とモンスターの関係性

高谷 : 指標詞・代名詞とモンスターの関係性

横路 : 内包オペレーター・パラメーターとモンスターの関係性

木田 : 虚構文とモンスターの関係性

- 各人の発表が終わったのち、発表者間でディスカッションを行い、残りの時間で発表者と参加者の間で質疑応答を行う。

1. Kaplan, D. 1989, “Demonstratives”, in J. Almog, J. Perry, and H. Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan*, Oxford: Oxford University Press.
2. Predelli, S. 2008, “Modal Monsters and Talk about Fiction”, *Journal of Philosophical Logic* 37, 277-297.
3. Rabern, B. 2012, “Monsters and Communication: The Semantics of Contextual Shifting and Sensitivity”, The Australian National University Doctoral Dissertation.
4. Santorio, P. 2012, “Reference and Monstrosity”, *Philosophical Review* 121, 359-406.
5. Stalnaker, R. 1970, “Pragmatics”, in his *Context and Content*, Oxford: Oxford University Press, 1999.